

身に着けていた財布

寄贈／田部眞一郎

爆心地から 1,020m 国泰寺町

市役所で被爆した田部英子さんは、隣接する公会堂の小さな池に避難して、迫りくる炎の旋風を必死に耐えた。そこはまるで「血の池地獄」であった。

ポケットに入れていたこの財布は、池の水に浸かり表面が剥げている。

戦後、英子さんは原爆の話題が出ることを嫌がり、51歳で亡くなるまでその話をするのはほとんどなかった。



英子さん 1944年(昭和19年)16歳の頃

